令和７年度　第１回大阪府スポーツ推進審議会　大阪府スポーツ推進計画部会　議事概要

日時　令和８年３月４日（水曜日）10 時から 12 時まで
場所　大阪府咲州庁舎 41 階　共用会議室⑧
出席者　委員（◎部会長、〇部会長代理）

◎木村　雅則　　四天王寺大学 教育学部 教授　教職教育推進センター長
〇冨山　浩三　　大阪体育大学 スポーツ科学部 教授
中西　悠子　　枚方スイミングスクール コーチ
永浜　明子　　立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
山口　志郎　　流通科学大学 人間社会学部 教授
横山　久代　　大阪公立大学 都市健康・スポーツ研究センター 教授

オブザーバー
大阪市 経済戦略局スポーツ部スポーツ課担当係長
公益財団法人大阪観光局 経営企画部 企画担当部長

［質疑応答等］□・・部会長　△・・委員　■・・事務局

１　開会

■　部会委員の二分の一以上が出席し、部会運営要領第４第２号に規定する定足数を満たし、会議が有効に成立していることを報告

２　挨拶

府民文化部文化・スポーツ室スポーツ振興課長挨拶

３　議事

議題（１）部会長代理の指名

□　部会長代理に冨山委員を指名。

議題（２）第３次大阪府スポーツ推進計画の進捗管理について

■　（資料２により大阪府スポーツ関連施策及び計画の進捗状況について説明）

議題（３）第４次大阪府スポーツ推進計画の策定について

■　（資料３により令和６年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」をもとにした課題整理について説明）

△　健康を理由にスポーツを実施する人が８割程度である一方で、仲間とのつながりや交流を理由に実施する人は年々減少しかつて 40%以上あったが、20%を下回る状況。ウォーキングやジョギングを少人数、あるいは１人で健康のために実施する傾向があることに加え、スポーツ庁は「階段上り」や「バス停１駅分の距離を歩く」などもスポーツの定義として拡大して捉えており、これらは仲間との交流目的で実施するものでないため、この傾向は仕方がない。

△　スポーツを通した健康づくりが重要となる。加えて、人と人とのつながりや関係作りがウェルビーイングの向上につながる傾向を示すデータがたくさんある。第３次大阪府スポーツ推進計画においても、人と人とのつながりづくりはエッセンスとしてあったことから、人と人とのつながりによるウェルビーイングの向上を引き続きめざしていくことが必要。

△　試合観戦等でたまたま集まった人たちや、イベントに参加する人たちとのゆるいつながりによる一体感、ボランティア団体で活動している人たちの一体感を養成するようなつながりがウェルビーイング向上に効果的である。

△　健康とともに人と人とのつながりをどのように作っていくか、第４期計画の中にエッセンスとして入れていくのが良い。

△　20 歳以上の運動実施率を上げることを考えたときに、子どものころに運動・スポーツが楽しいと思うことは大事だが、子どもの運動実施率が低下していると感じる。気温上昇や施設の環境面の影響もあるが、子どもが外で遊ぶ機会が減っている。課題を抱えている年代は様々あるが、こどものときに運動が楽しいと思える機会、取組みの設定が必要。また、子どもと大人が同時にスポーツを体験してもらえるような取組みも必要。

△　チームスポーツは生涯継続が難しく、人と交わらないでできるスポーツをしたい傾向が見られるため、ヨガやウォーキングなど１人で実施できる種目が学生から人気。個人が生涯スポーツを続けていく時に、自身がどこに重きを置くのかが大事である。

△　コミュニティやつながりを作る施策から、運動・スポーツ実施につながる部分を調査データと組み合わせながら、つながりやコミュニティの部分を可視化していくことが必要。居場所を創るというのは抽象的であるが、そのあたりの数字的データがあれば、より大阪府の施策が進んでいると全国に発信できる。

△　経済状況にもよるが、大きな国際大会があればスポーツクラブに入会する人が増えることはよくある。この３年間で高齢化が進み、高齢者が身体を動かすことができない身体状況になっていることも考えられるため、歳を重ねても身体を動かすことや、身体活動に関して日常に根差したものにできるような場の設定、機会の提供は必要。

△　年配の方はつながりやコミュニケーションを求めている方が多い一方で、若い世代はリアルの交流は煩わしいと思っている世代であり、オンラインのツールやサイトなど、スポーツ以外に楽しいことが色々あり、若者がスポーツを日常的なものにするのは難しい部分もあるかもしれないが、今後高齢化社会が進む中で、高齢者の身体を動かす場、集える場を提供していくのが、今後も引き続き必要。

△　ささえる活動への参画が少ないのは、ささえる方法が難しい、どのようにささえればいいのか、そもそもささえるとは、どのようなものかのイメージできないのかなと思う。スポーツ推進委員の認知度を高めるのもひとつであるとともに、様々なささえる方法があることを周知し、スポーツをする人がささえる活動に参加するのもそうだが、ささえることならできるという方に、ささえる活動を知っていただき、ささえることによって、つながりやコミュニティ形成によるウェルビーイングが達成できればと思う。

□　様々な施策があるが、子どもたちや若い世代から非常に遠いところにそれぞれの施策があるような気がする。みんなでスポーツをする一体感の素晴らしさ、ウェルビーイングの向上に

つながること、ささえることのすばらしさ、スポーツをとおしたコミュニティの広がり、そういったことが自分の生きがいにつながることをうまく発信し、様々な施策が府民の近いところに感じていただけることができるような発信の仕方の工夫ができればと感じる。

■　（資料３により第４次大阪府スポーツ推進計画策定の視点と議論いただきたい論点及び第４次大阪府スポーツ推進計画策定の視点について説明）

△　第４次の視点について、資料に記載されている視点は大事。「つながる」は、がちがちではなく緩やかな一体感みたいなイメージがあってもいいと考える。

△　府の計画なので、色々な市町村があると思うので、府全体を盛り上げられるような視点も大事。実施率のような直接府民にアプローチするのは基礎自治体である市町村になるので、自治体との連携、場合によっては意見を伺うなど、連携をとっていけるような方針を示すことが大事。

△　各市町村の状況を知ることで、地域住民が他自治体と交流ができるような計画を策定できたらと思う。

△　府民全員を対象にスポーツ振興を進めるものであるが、実施率の低い層をターゲットにしていくことも重要で、年代層で戦略を変えることも必要。障がい者の運動・スポーツ実施率は低いが、障がい者だけに限って低いのではないため、どの時点まで障がいのある人のスポーツを特出ししていくのかについて議論いただきたい。

△　大阪都市魅力創造戦略では国際エンターテインメント都市大阪をめざす姿としており、スポーツツーリズムについて議論に挙がっている。大規模スポーツ大会誘致の調査事業を経て、次年度から支援制度を策定すると聞いている。大阪府全体の都市魅力を考えると、スポーツを「する」となった場合、楽しいということは非常に大事。また、「みる」だけでもエンターテインメントであり、どこでも身体をうごかすことができる事業展開も必要となってくるため、事業同士の連携も図りながら進めていければいいと考える。

△　国のスポーツ基本計画を参考にしながらではあるが、持続可能な社会の実現に向けてと謳われている。スポーツについて、国際大会による一過性のブームではなく、スポーツの価値が長期的に安定していくような、持続可能性が念頭にある。スポーツ人口が増えることで、ウェルビーイングが向上すれば、医療費や介護費の削減につながり、持続可能社会につながっていくことから、持続可能性を基本理念としてベースに置き、計画を作る必要がある。

△　持続可能性が基本理念におかれていた万博を開催した大阪だからこそ策定できる計画があると思う。生涯スポーツ施策でも、例えば部活動において一定の人に負担がかからないことや、地域で自立、自走していけるようなプログラムが必要であるし、スポーツツーリズムでも地域に負担がかからないような方策を考える必要がある。これらはすべて持続可能性の理念に則っており、計画もそれに沿ったものにしていただきたい。

□　策定の視点について、具体的なイメージのできるものとなっている。スポーツ振興の視点では、20 歳以上も大事だが、小中学生や高校生にスポーツを楽しく素晴らしいと実感を持たせてあげるのが大事。その観点で考えると、部活動指導はとても大事な視点。いま、部活動の地域展開により、外部指導へ移行しようとしているが、人材の確保だけでなく指導者の質の

担保も大事であり、不適切な指導をしていると信頼がなくなり、保護者は子どもを通わせようと思わない。

□　評価育成とまではいかなくても、年度ごとにちゃんとできているか見える化することで、保護者も安心して子どもを通わせることができ、指導者自身の成長にもつながる。こどもたちが時間を持って考えられるような内容にしていくことができるようお願いしたい。

■　（資料３により第４次大阪府スポーツ推進計画の全体構成イメージについて説明）

△　めざすべきスポーツ像の中に、「未来のウェルビーイングを創造する」とあるが、府民の目線になると「作っていく」や「獲得する」という表現になるのかなと思う。今後、項目の具体的な中身の検討が必要。

△　オーストラリアではオリンピックとパラリンピックの選考会が同時に行われるが、日本では完全にわかれている。種目の特性上仕方がない部分はあるが、めざすべきスポーツ像で「すべての人」と表現している一方で、１の柱の重点項目がわかれすぎていると感じる。わかりやすくするのであればわけるべきであるが、すべての人がと言うのであれば一緒にしてもいいのではないか。大規模スポーツイベント、ワールドマスターズも周知しながら、スポーツの良さを知ってもらいたい。

△　めざすべきスポーツ像において「すべての人」と表現しているのに、重点項目でパラスポーツを特出しすると矛盾した形になる。障がい者以外にも実施率が低い方もいるので同じように扱う時代にしてもいいのではないか。

△　「都市」は広域なスケールの一方で、「まち」は市町村レベルでよく捉えられる。めざすべきスポーツ像について、ウェルビーイングの向上であれば、生活者を実感する範囲で「まち」という表現を使っていると把握している。一方、都市魅力創造戦略では一貫して「都市」が使用されており、その関係性をどこかで整理してもいいのではないかと考える。「都市」は政策単位、「まち」は生活実感というような形で使われると思うので、使い分けることでよりマスタープランの精度が上がると感じている。

△　共生に視点が置かれており、障がい者の生涯スポーツの獲得とか健康づくりの視点が抜けていると日々感じる。共生社会の実現は大事であるが、パラスポーツをわざわざ重点項目として出す必要はないと感じる。

△　１の柱、２の柱はいずれも重要であり核になってくると思うが、この柱のボトムにサステナビリティがあり、それぞれの柱は基本理念にのっとって取り組んでいかなければならない。

△　１の柱で健康のサステナビリティ、２の柱で地域のサステナビリティが実現すると、ウェルビーイングが向上し、最終的に社会の持続可能性が実現可能という概念図を考えているので、まずは基本理念に据えていただくことが必要。

□　パラスポーツの推進を特だしすることには疑問を感じる。学校現場では「ともに学びともに育つ」というワードがあり、学校だけでなく生徒自身にも届きやすいフレーズと感じている。そういう観点から「ともにスポーツ、ともに楽しむ」そういった雰囲気の表現をしていただいたらパラスポーツの充実にもつながってくる。

□　皆が手を取り合い一体感を持ってスポーツを楽しみ、人生をよりよくしていく、そういう観

点に関して少し工夫していただきたい。

【オブザーバーの意見】

・　大阪観光局では、スポーツツーリズムに取り組んでおり、大阪のスポーツツーリズムをもっと際立ったものにするために、他都市との差別化、何が違うのかという観点について考えており、やはりプロスポーツが盛んであることが大阪の大きな武器であるので、そういうところ。最近では大きな国際的なスポーツ大会が開かれており、ワールドマスターズゲームズにつながっていったりする流れがある中で、大阪のスポーツをもっとアピールできるのではないかという観点から進めていくところと、都市とアウトドアアクティビティの現場が近いのが大阪の魅力であり、大阪環状トレイルで大阪府みどり推進室と連携しながら、もっと PR するためのイベントを今年度から企画している。アウトドアアクティビティだけを売り込んでもなかなか伝わらないので、食や銭湯文化といった大阪の他の魅力をアウトドアアクティビティと組み合わせることで、魅力発信を行っている。

・　本市でも、スポーツ振興計画を策定しており、令和８年度で満了を迎える予定であるため、次期計画策定に向けて進めているところである。その計画の中で府と同様にスポーツ実施率の向上を目標としており、65%に対して 50%前後で推移しており、大阪府と共通の課題と認識している。また、都市魅力創造戦略について、共通の項目も多くあるので、ぜひ連携しながら大阪の課題解決に向けて進めていきたい。

４　さいごに

△　ワールドマスターズゲームズについて、国を挙げてのイベントになるかと思うので、大阪府としてもワールドマスターズゲームズの開催により、府民の生涯スポーツ意欲が高まることの機会をどのように取り上げるのか、柱にあげるのか、項目にあげるのか、ワールドマスターズゲームズという言葉を使って計画のどこかにあげてもいいようなイベントかなと思うので、今後検討していただきたい。

□　ワールドマスターズゲームズとなると、身近な方が参加できる機会ということを発信していただいて、興味が広がっていけばと思う。

△　こどもたちにあんなふうになりたい、大人になってもスポーツするものだということを、子どもたちに伝えるにはとても良い機会だと考えるので、教育の場でも取り上げるいい機会かと思う。

４　閉会

■　次回の日程・場所はあらためて調整のご連絡をさせていただく旨説明